55歳のつぶやき

変わりゆくもの、変わらないもの

清水 勇治（高38回）

大学卒業後、音響映像機器メーカーのパイオニア株式会社に入社。新規製品・技術の研究開発に従事しました。電機メーカーとしてのモノづくりの視点から、音楽や映像のメディアの変遷に触れつつ、つぶやきたいと思います。

音楽・映像メディアの変遷

音楽メディアは、レコードに始まり１９６０年代にカセットテープ、１９８０年代にはＣＤが登場して一気に普及拡大します。さらにインターネットの普及に伴い現在はストリーミングによる定額（サブスクリプション）サービスにより多数の楽曲を楽しめるようになりました。

映像メディアは、映画に始まり１９４０年代からはテレビ放送が開始されます。その後ＶＨＳ等のテープメディアが登場し、映画やテレビ放送を録画して自由に視聴できるようになりました。そして１９９６年にはＤＶＤが登場します。ＤＶＤはデジタルで高密度にデータを収録することができ、映像・音声の品質が向上しました。ＤＶＤが広く普及しているのは皆さんご存じの通りかと思います。その後Ｂｌｕ－ｒａｙが登場しましたが、現在は音楽同様ストリーミングサービスにより多数の映像を楽しめるようになっています。

ＤＶＤレコーダー開発の経験

幸運なことに私は、世界初となるＤＶＤレコーダーの製品開発（１９９９年発売）に携わることができました。ＤＶＤ登場以前のＶＨＳは、テープなので頭出しなどの巻き戻しや早送りに時間がかかる、アナログ記録で品質も安定しないという課題を抱えていました。ＶＨＳからＤＶＤへの変化では、製品のキー技術がアナログのすり

●しみず・ゆうじ
飯田市大瀬木（伊賀良中）出身。東京農工大学工学部卒業。１９９１年パイオニア株式会社入社。事業譲渡により、現在はエア・ウォーター株式会社に勤務。趣味はオートバイ、音楽鑑賞。

合わせからデジタル信号処理になり開発規模が増大したため技術開発は大変苦労しましたが、製品の品質は安定し瞬時の頭出しや高速ダビングが可能になるなど、映像視聴・配布スタイルが大きく変わり普及拡大しました。テープからディスクへという大きなメディアチェンジのタイミングに立ち会えたのは、技術者としてとても貴重な経験でした。映像を楽しむという目的は同じでも、手段が変わることで提供される価値が劇的に変わり、顧客の満足度にも大きな影響を与える、ということを体験することができたのです。

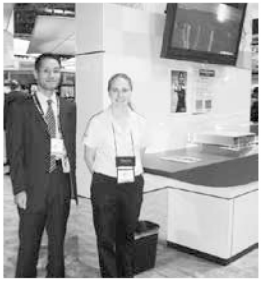
手段と目的

当時の会社の理念は「より多くの人と感動を」で、非常に考えさせられる言葉でした。機器メーカーは「メーカー」なのでモノづくりそのものを目的にしがちですが、機器はあくまでも手段。音楽や映像を楽しみ感動を与えることが本質的な目的です。機器はその手段を提供しているに過ぎないわけです。それを見失わないようにというメッセージであると受け止めました。

手段と目的を分けて理解すること、物事の本質（目的）を見極めることは大切なのですが、なかなか思うようにはいきません。一見素晴らしそうな機能や提案が目的を見失っていて全く受け入れてもらえない、という失敗も数多く経験しました。開発を進めるうえで、「目的はなにか、本当に提供したい価値は？　その価値を提供するための手段として、この提案は最適なのか？」といつも考えされられました。

音楽・映像を楽しみたいという気持ちは普遍性を持ちますが、コンテンツの提供手段は時代とともに変化していますし、既存の手段がすべて置き換わるわけではなく、より多様化し個々の満足度が高められる方向に拡大し続けると思います。

2005 年、米国での電子機器見本市にＢＤレコーダ試作機を展示



これから

音楽・映像に限らず「変わらない・変えるべきでない目的」は、見失うことなく手段をその時代に合わせて工夫することで、より満足度を高めて達成され持続していくのではないかと思います。現在は勤務先が変わったものの、モノづくり（医療機器の製品開発）に従事しています。「仕事を通してどのように社会の役に立てるか」を考え、「手段と目的」を意識する毎日です。